跡見学園女子大学マネジメント学部紀要　創刊号　(2003年3月15日)

感覚性・共感・模倣

―― カバニスの人間学を巡って ――

Sensibilité, Sympathie, Imitation

―― autour de "La science de l'homme" de Cabanis ――

村　松　正　隆

要　旨

論者は本稿において、フランス革命期に学問上のリーダーシップをとると同時に、現実の医療政策にも少なからぬ影響を与えたイデオロジスト、カバニスの議論を取り上げる。カバニスの哲学は市民に対して、「自らの情念が公益のかわりを占めてしまうことがないように」良識を要求するものであったが、この要求は何らか超越的審級への訴えによってなされるものではなく、人間本性それ自身に基盤をもつものであった。この論点を理解するためには、カバニスの主要著作『心身関係論』の議論を整理しなければならない。「感覚性」の概念を導きの糸としつつ人間における「肉体的なもの」の重要性を強調するカバニスは、さらに人体において諸器官がお互いに「共感」しあいながら、全体的なネットワークをなしていることを強調する。この「共感」の概念は、さらに他者とのコミュニケーションの場面においても重要な意義を持つようになる。人間は他者に「共感」することによって初めて自らの情念ではなく公益に従う存在となる。だからこそカバニスにとっては、「共感」の能力、ならびにこれと密接なつながりをもつ「模倣」の能力を陶冶することが重要となる。

1.　はじめに

「哲学」と「政治」という領域がいかなる関係を取り結びうるのかという問いは、プラトン以来多くの人々を魅惑してきたテーマであるが、現実の歴史を振り返ってみれば、哲学に専門的に携わる人間が現実的に政策の立案に積極的に関わった事例はそれほど多くない。そうした数少ない例の中で注意を引くのは、フランス革命期のイデオロジスト（ないしイデオローグ）と呼ばれる人々の働きである。コンディヤック、あるいは啓蒙のフィロゾーフたちの議論を引き継ぎながら、実際に政策の立案などに関わった人々として私たちはデステュット・ド・トラシや本稿で扱

うジャン・ジョルジュ・カバニスといった人々の議論を取り扱うことができる。

前者のトラシは一方で「イデオロジー」(観念学) という新たな造語を立ち上げて、人間の知の諸々のあり方を「観念」という場所で押さえ総合的な知の体系の構築を目論むと同時に、当時の公教育のありかたを決定するに少なからず関与している。また本稿で取り上げるカバニスは、フーコーの指摘を待つまでもなく、新たな医学的人間学を立ち上げると同時に、当時の医学・衛生学の政策に大きな影響を与えている。

カバニスの医学的人間学と彼の政策立案とがいかなる関係にあるのか、これを明らかにすることは極めて魅力的なテーマであるが、本稿では紙幅の関係上、問題を一点に集約したい。

カバニスは、自らの医学的人間学を展開した主著、『心身関係論』の中で、共和的な政府は、市民たちが「自らの情念が公益のかわりを占めてしまうことがないように」良識を要求する、といったことを述べている (Cf., Cabanis., *OP I.*, p. 162)。ところで注意したいのは、超越的な審級を拒否するカバニスにとって、市民に対する政府のこうした要請は、なんらか超越的な原理に基づくもの、あるいは権威に乗っ取って市民に要請されるものではなく、人間の本性に基づくものでなければならない。つまり、人間は己の本性に従っていれば、本来、「公益」を重視して活動する存在者であるが、何らかの誤った風習や制度によって、自己の「情念」を先行させてしまうようになる、というのがカバニスの基本的な構えである。そのためカバニスの戦略は二重のものとなる。つまり、一方で人間が「公益」を重視する存在者であることを自らの医学的人間学に乗っ取りつつ証明すること、他方でそれによって明らかにされた人間の本性が発現するような諸制度を確立するということ、これがカバニスの狙いとなろう。

本稿ではここで述べたカバニスが自らに課した課題のうち、前者の側面をとりあげ、いかなる意味で人間は「公益」を重視する存在者であるといえるのか、これを論じるカバニスの議論を紹介することとしたい。

2．イデオロジーの戦略

啓蒙の遺産を引き継ぎながら新たな「人間の学」(la science de l'homme) という理念を立ち上げようとしたイデオロジストたちの戦略を、概括的にではあるが眺めておきたい。

啓蒙の様々な遺産を引き継ぎ、神学的な形而上学を打倒しつつ、自然科学から社会科学までを統括するような学問体系を構築しようとする彼らの戦略には様々な特徴があるが、主要な特徴としてまずは次の二つを挙げることができるであろう。

1）諸学の統一という理念

2）分析という理念の優位

諸学の統一に関して言えば、例えば「イデオロジー」(観念学) という言葉の発明者であるデ

ステュット・ド・トラシはその主著『観念学綱要』の中で、自らの観念学を「諸理論についての理論」[1]と規定し、かつこの学問は「様々な認識を確証し純粋にすること、これらを互いに近づけ、より一般的な原理に結びつけること、そしてついにはこれらがもつ共通点によって、これらを一つに結び付けること」[2]と述べる。

ところでトラシの言う「一般的な原理」とは「観念の形成の学」である。諸々の知は一度「観念」という場所に回収されることによってのみ実効性を得るものとされ、その「観念」の形成の道筋を辿ることこそが、規範的な観念のあり方を見極めることにつながり、諸々の学問を改めて正確なものとして立ち上げることに貢献するという理念を見て取ることができる。そして一度確保された「観念」という領域に向けられるべき方法は、コンディヤックから引き継がれた「分析」という方法である。

イデオロジストたちの間でのこの「分析」という理念の優位は、例えば次の言葉にも表れているだろう。以下に引くのは、フランス革命期に「イデオロジスト」たちが推進した師範学校の設立、これをめぐってイデオロジストのガラが起草し、ラカナルが議会で読み上げた演説の一部である。

「分野はちがっても、対象が異なるだけで、観念は同じように形成されるのだから、分析は、あらゆる種類の観念にたいして同じように簡明な言語と明晰さをもたらすことができる。この方法は、ベーコンとロックが求めたことを実行し、人間の悟性を作り直すことのできる唯一の方法であり、この方法によって、精神諸科学、すなわち自分自身の美徳によってみずからを統治する諸国民に必要不可欠な精神諸科学は、厳密な物理学と同じほど厳密な証明に従うことになるだろう。」[3]（強調は引用者による）

「分野はちがっても、対象が異なるだけで、観念は同じように形成されるのだから」、諸々の学問について論じるということは結局「観念」を論じるということにつながっていく。そして、「観念」に対して「分析」を加えるということはすべての観念に「簡明な言語と明晰さ」をもたらすことになる。「観念」において諸学は統一されるのだから、「観念」の形成について分析を加えることが諸々の学問を厳密なものとすることにつながる、というイデオロジーの戦略（あるいは信念）はこれらの文章に容易に伺えるだろう。

ところで、カバニスにとってもやはり諸学問は統一されなければならないものであるのだが、彼にとって諸学を統一するに値する学問とは何であろうか。また、彼が分析の対象とするものとは何であろうか（先回りして言っておけば、彼の「分析」の対象は、単純に「観念」であるとはいえない）。彼の主著『心身相関論』の冒頭もまた「諸学の統一」という理念で飾られている。

「市民諸君、すべての科学と技芸とを一つの総体、分割できない全体、共通の起源によって結びつき、さらには自らが生み出す果実、つまりは人間の感性と幸福によって結びついている、いわば同じ幹から生じたいくつかの枝と見なすと理念は、恐らく美しく偉大なものである。」(Cabanis., *OP I.*, p. 124)

カバニスのこの言葉によれば、諸学はその起源において結びつくだけではなく、各々が「幸福」を生み出すという点においてもより緊密に結びついている。

この言葉をきっかけにして、カバニスにとっての「人間の科学」の理念がいかなるものであるのか追いかけていくこととしよう。カバニスにとって諸学を統一する「共通の起源」「同じ幹」とはいかなるものであるのか。また、カバニスの言う「幸福」とはいったいいかなるものであるのか？

前者の疑問に対する答はおいおい見ていくこととして、まずは、カバニスの幸福の定義を見てみたい。

「幸福の源泉そのものへと立ち戻ると、幸福とは特に、諸能力の自由な行使のうちに、そして諸能力が活動状態に置かれるときの力と容易さの感知とのうちにあることがわかる。もちろん諸器官の作用はどれもが同じように必要ではないし、諸欲求のうちでも、合間が置かれたり［満足させられるのが］遅れたりすると他のものより苦痛を多く覚えるものがある。だがともかく、感覚することと活動することは生あるものにとって一般的な欲求である。そして、生は、すべての感覚器官が自然の秩序を逸脱することなく、しかしより強く感覚し協力するほど完全なものとなるのだ。これが肉体的な良き状態を構成するのであり、モラルの幸福もやはりここに存する。というのもこれは肉体的状態の結果、あるいはむしろ別の視点、別の諸関係から考察された同じ良き状態だからである。」[4](Cabanis., *OP I.*, p. 260)

人間の「幸福」とは諸能力が自由に行使できること、そして諸能力が行使されるとき「力と容易さ」とが感知されるという点にある。そしてさらにいえば、諸能力を生み出す感覚器官（後に見るように、「諸能力」とは感覚器官の行使に他ならないという発想はトラシやカバニスに共通なものである）が「より強く感覚し協力するほど」人間の生は完全なものとなり、これが肉体的な幸福を構成し、ひいては精神的な幸福をも構成する。

この「諸能力の自由な行使」として定義された幸福の概念をさらに補強しながら、同時にこの「幸福」を実現するためにはどのような研究がふさわしいのか、カバニスは次のように述べる。

「[‥前略‥] 何にもまして有益で自然なのは、人間の肉体的と言われる能力と、精神的［モラ

ルな][5]といわれる能力との間の諸関係を探求することである。実際、一方で私たちに最も近しい対象とは私たち自身である。そして、私たちのよきあり方とは、私たちの実存と結びついた諸能力の善用にのみ基づくものなのだ。そして他方、人間の諸能力という言葉は、確かに、そうした能力の諸器官の活動によって引き起こされる諸作用を多かれ少なかれ一般的に表明するものである。[‥中略‥] 実際、精神的な諸能力が生じてくるところの肉体的な諸能力が、これらの働きの総体を構成するのである。なぜならば哲学的な言語が肉体的なものと精神的なものという二つの変容を区別するのは、観察者たちがその分析の最初においてすべてを混同してしまうことがないように、生命の諸現象を二つの異なった視点において見ることを強いられてからである。」(Cabanis., *OP I.*, pp. 316f)

本稿ではあえてカバニスの議論の立脚点を最初に紹介せず、徐々にそれが明らかになるように論述の道筋をとってきたが、この文章には、カバニスが人間の幸福を実現するためにはどのような学的戦略が必要であると考えていたかがかなり明確に出ている。

これまでの記述を確認のためにたどりなおしてみると、カバニスの戦略は次のようになる。諸学問は「共通の源泉」において相互に結びつくと同時に人間の「幸福」という果実を生み出すという意味でも相互に結びついている。ところで人間の「幸福」は「諸能力」の自由な行使にあるわけだが、これら「諸能力」は感覚器官の働きによって生み出されるものであり、「精神的な諸能力」も「肉体的な諸能力」から生じるものであるのだから、人間における肉体的な感覚器官の働きが綿密に記述され、その働きが明るみに出されること、諸能力の発展の様態、さらには諸能力に影響を与える様々な要因が明らかにされること、これこそが人間の幸福の増進に貢献するということになろう。

カバニスにとってその役割を果たすのは「医学」に他ならない。医学こそは肉体的諸能力のありかたを研究することで先の理念に貢献する。

およそ諸々の学問は人間の「幸福」を実現するという意味で一つに結びつくものであるが、他方で諸学が実際に人間の「幸福」を実現するためには、「人間」という存在者の様相が詳らかになるのでなければならない。そして、論じられるべきは、たとえば「精神」として抽象化されて特化される人間のありかたではなく、「肉体」としてある人間のありかた、肉体的諸能力の様態、さらにはその正常なあり方と逸脱した様態、肉体としての人間に及ぼされる、年齢や周囲の気候、あるいは慣習などといった事柄である。

諸学は「肉体的人間」(l'homme physique) を幸福にするという意味で一つに結びつくものであったが、まさにそのゆえに「肉体的人間」を論じる学問、つまりは医学に依存するのでなければならない[6]。

「医学」あるいは「生理学」に基づいた人間学を構想し、他の諸学がこれに依存しているよう

なそうした学問の木をカバニスは描き出そうとしている。この事態を簡潔に描写するStaumの言葉を引いておこう。「カバニスは、公的道徳、教育家、立法家もまた生理学者のアドバイスを求めなければならないと確信している。人間における肉体的なものが「激しくて変わりやすい外的要因の働き」に従うということが科学の基礎なのだ。」[7] (Staum., p. 177)

先に述べた「分析」という理念とあわせて言えば、カバニスにとって分析の対象とされるべきはまさに「人間の肉体」であり、その錯綜したネットワークのあり方である。カバニスは身体の深みを発見する。分析されるべきは皮膚の下にうごめく諸器官の配置や神経のネットワークである。では身体の様々な働きが分析されるに従って見出される究極的な場所は何であろうか。

3．感覚性という場所

イデオロジストたちがなす様々な議論が収斂する地点を改めて確認しよう。コンディヤックの感覚論の後継者たるイデオロジストたちにとって、あらゆる形而上学的な前提を拝して学的言説を練り上げるための出発点は、人間が「感覚する」存在者である、という事実である。例えばデステュット・ド・トラシは、その『観念学綱要』の中で「感覚するというのは私たちの実存の現象であり、私たちの実存それ自身である」[8]と述べる。また、目下私たちが取り扱っているカバニスも、私たちが「存在する」という事態を、「私たちが感覚する」という場所において定義しようとする。極めてデカルト的な色彩を帯びたカバニスの言葉を引いておく。

「感覚性（sensibilité）がなければ、私たちは外界の対象の存在を知らされることは全くないであろうし、私たち自身の存在を統覚する術すらないことになろう。あるいはその場合には、私たちはむしろ存在しない、と言うほうが良いのかも知れない。私たちが感覚するまさにそのときから、私たちはあるのだ。」(Cabanis., *OP I.*, p. 142：強調は引用者による)

「私たちはある」という存在を巡る議論は、形而上学的な超越者へと場所を移すことなく、「私たちは感覚する」という正にその地点においてのみ確保される。そしてこの「私たちが感覚する」という能力、上の文章で言われている「感覚性」(sensibilité) こそが、カバニスの議論を支配する徹底的に重要なキーワードとなる。わけても、単純な生気論にも、あるいは機械論的な生命把握にも与することのないカバニスにとっては、この「感覚性」という言葉こそが、人間の「精神的なもの」と「肉体的なもの」との間の相互関係（確認しておけば、これを解き明かすことこそが、カバニスの課題であり、ひいては総合的な「人間の科学」の構築のために必要な作業である）を明らかにするためのキーワード（悪く言えばマジックワード）となる。

「感覚性とは、生命現象の研究、あるいはそうした諸現象の真の連なりの方法的探究において

到達する最後の項である。これはまた、知的諸能力および魂の情動の分析がもたらす最終的な結果、あるいは一般的な言い方に従えば、その最も一般的な原理である。こうしたわけであるから、肉体的なものと精神的なものはその源泉において混ざり合う、あるいはよりよく言えば、精神的なものは、より特殊ないくつかの視点から考察された肉体的なものに他ならない」(Cabanis *OP I.*, p. 142)[9]

生命現象の研究の分析は究極的に「感覚性」という場所へと収斂し、見出された「感覚性」は逆に、人間の諸能力の生成を論じるべき出発点ともなる[10]。

ところでここで、古くからある哲学的な問題、すなわち心身問題は大きく位相を変える。実体的に取り出された「精神」という項と、「精神」と鋭く対立する形で取り出された「物質」という項とが、現実の人間の生においていかにして相互に交流するのか、いかなる形で両者が相互に影響を与え合うことが可能なのか、という形ではもはや問題は立てられない。そうではなく、およそほとんどすべて「存在」という語と外延を等しくする形で取り出された「感覚性」という一元的な場面から、いかにして「精神的なもの」と「肉体的なもの」とが分化していくのか、その過程を捉えることこそが問題なのだ。すなわち、「精神」と「肉体」との分離が予め所与のものとして立てられ、このスキームに則って私たちの生の異論の余地なき事実である心身の相関が論じられるのではなく、そうした見方を脱落させた上で取り出される「感覚」という場面から、いかにして「精神的なもの」と「肉体的なもの」とが分化していくのか、その生成を語ることこそが問題となる。なぜならカバニスにとっては、心身の相関とは同じ唯一の「肉体的なもの」が別の視点から取り出されたものであるのだから。

ギュスドルフの言い方を借りれば、「肉体的なもの—モラルなものという対が、魂—身体という伝統的な存在論的二元論にとってかわったのだ。「人間の科学」という概念はこの新たな問題系の発生に対応している。」(Gusdorf. p. 388)「語彙の変容は、二元論的な概念から個人という実在の一元論への移行を表しているのだ。」(Gusdorf., p. 461)

しかるに注意しておきたいが、カバニスのこうした議論は、コンディヤックの議論の延長線上にストレートに位置づけることができるものであろうか？すなわち、「感覚」を重視するという共通性から、両者の議論の共通性をどの程度論じることができるだろうか？しばしばいわれることであるがここで注意しておきたいのは、コンディヤックとカバニスの間では、次の二つの要因が大きな論点の差を構成している。

まず第一に、コンディヤックにおいては、基本的に外的感覚しか議論の対象とならない。カバニスは感覚という広がりのありすぎる言葉を分節化しない姿勢に批判的である。「分析的な哲学者たちはこれまでのところはほとんど、外的な対象から到来する諸印象、そして思惟の器官が区別し表象し結合する諸印象しか考察してこなかった。彼らが「感覚」という名称の下で意味していたのはこうした印象だけだったのであり、残りの印象は彼らにとって曖昧なままであった。」

(Cabanis *OP I.*, p. 174) すなわちコンディヤックにおいては、外的感覚が独立して取り出され、これと感覚の対象物との関係の中での諸能力の生成が言われるわけであるが、カバニスはこれに別の審級を付け加える。「内的感覚」である。この感覚の重要性をカバニスは誇らしげに、次のように言う。「これらの考察は人間の研究にとって、全く新たな道を開くであろう。」(Cabanis *OP I.*, p. 557)

内的感覚が外的感覚との対比の中で取り出されるのは、ただコンディヤックの認識論上の不備を突くためだけではない。「内的感覚」が強調されなければならないのは、この「内的感覚」が、人間のモラルに関わる生に対して大きな影響を及ぼすからである。カバニスは『心身相関論』の第二課第四節において、コンディヤックと対比する形で問いを次のように立てる。その新たな問いとは、コンディヤックの彫像の比喩が想定するように、外的感覚のみが人間の意識生活にひたすら影響を与えるのか、はたまた「内的感覚も同様に、健康な人間や病気の人間の研究によってその恒常性が明らかとなっているある法則に従って、私たちの精神に関わる傾向性や諸観念の生産に貢献しているのか、そしてそうであるとすれば、この新たな点へと特に向けられた観察によって、私たちは容易に、自然の法則を認識しかつ、正確で明らかにこれらの法則を提示することができるのではないか」(Cabanis., *OP I.*, p. 174：強調は引用者による) という問いである。

この問いに対するカバニスの答は徹底的に肯定的なものだ。カバニスは、私たち人間の生において例えば胃腸などの調子が大きくその精神生活に影響を与えることを指摘しながら、次のように述べる。「知られているように、内的諸感官のある状態、特に、内臓や下腹部のある状態においては、人は感覚したり思考したりする度合いが変化する。こうした部位に形成される病気は、感情や観念の習慣的な秩序に変化を与え、妨害し、時には普段と完全に逆にしてしまう。」(Cabanis., *OP I.*, p. 174：強調は引用者による) カバニスは以下、内的感官が人間のモラルに関わる生に様々な影響を与えることを論じながら、この節の最終部近くで次のように結論付ける。

「これまでの説明が証明しているように、諸観念や精神的な諸傾向はただ感覚と呼ばれているもの、つまり本来の意味での感官によって受容される明晰な印象にのみ依存しているだけではない。それだけでなく、いくつかの内的感官の諸機能から生じる諸印象も、多かれ少なかれこれに貢献しているし、ときにはこれらだけが諸観念や精神的な諸傾向を産出しているようにも見える。現在のところはこれで十分だろう。」(Cabanis., *OP I.*, p. 178：強調は引用者による) 繰り返すが、「内的印象」という観念はただ認識論上のステイタスが云々されるためにその存在が言われるのではなく、むしろ私たちの生の内実、わけても「精神的な諸傾向」に影響を与えるからからこそ、その存在が言われなくてはならない。

また第二に、カバニスは個々の感覚を独立して取り出し、しかる後に、それら諸感覚の連合を論じるといったコンディヤックの議論の進め方を根本的に否定する。コンディヤックにおいて

は、まず嗅覚、味覚といった五感に対して何らか外的な対象が与える印象について論じられ、これらの印象が私たちの能力を陶冶することを言い、ついでそうした諸能力が、あたかも粒子が形成して新たな化合物を形成するかのように結合して別の能力を形成する、そのような要素論的な道筋をとる。しかるにカバニスにおいては、私たちが後に見るように、諸々の感覚とは「共感」(sympathie) を行うものであって、この共感の中で、個々の感覚は要素論的にではなく、いわば響きあうかのように調和しあい、その調和の中でひとつの生が営まれるのである。

カバニス自身の言葉を見よう。

「[コンディヤックが言うところの (引用者補足)] システム全体からは絶対的に孤立した状態で活動する、実際にはそれがなければ感覚が生じ得ないはずの生命的影響を奪われてしまった一つの感官の部分的作用などは、実際に感覚が知覚され、あるいは諸観念や欲望が形成される様態には全く似ていない。」(Cabanis, *OP I.*, p. 552)

生命に携わる諸々の器官の共感的な働きの中で営まれるのが生の実相であり、これを理解するために、要素論的に一つの感官のみを取り出したところで、生の実相に近づくことはできない。諸器官の能力の発展は、むしろ他の感官との様々な関係のとり方によって決まってくるのだ。「しかしすべての感官の持続的交渉を保つこうした一般的な紐帯のほかにも、これらの諸器官はより特殊でより内密な関係によって結び付けられているということがありうる。結果としてそれら諸器官のそれぞれの機能は、互いに依存しあったより特別なものとなりうるのである。」(Cabanis., *OP I.*, p. 554 : 強調は引用者による)

分析は単純なものを見出そうとするが、見出された単純なものが存在論的に先行するわけではない。むしろ複雑なものを所与として受け入れ、かつそれを構成する諸要素を、全体の機能の中で捕らえなおさなければならないのだ。「良き分析はいかなる感官の作用をも他の感官の諸作用から孤立させない。諸作用は時に必然的に、そしてしばしば偶然的に協力して働く。これらの諸機能はたえず他の諸器官や内臓の影響に晒されている。これらはさらに直接に力強く、全体的なシステムわけても脳中枢の活動によって決定され導かれる。」(Cabanis., *OP I.*, p. 557)

4．共感と模倣

これまでに確認したのは以下の事柄であった。

カバニスによれば分裂した諸学問の統一は、人間の「幸福」を産出するという一点において収斂するものであったが、他方でその故にこそ、「人間」、それも「肉体的人間」の研究が重要性を帯びてくる。新たな学たる「生理学的イデオロジー」は「肉体的人間」を分析の対象とし、人間の「幸福」のよりどころたる「肉体的諸能力」のあり方を論じる。そして「分析」は「感覚性」という究極的な項を発見する。

しかして「感覚性」を行使する諸器官は、全体のシステムから孤立してただ一つで独自に働く

のではなく、人体内の様々な諸器官の影響のもとで働くのであり、そうした全体的システムを取り出すために用いられた言葉が「共感」というタームであった。

生理学的イデオロジーは、諸々の諸器官が「共感」によって互いに影響を与え合い、かつ協力し合うといった相のもとで、人体のイメージを提出する。

ところでここで持ち出された「共感」という術語は、人体内の諸器官の「共感」といった意味合いから拡大され、さらには人間が他者とのコミュニケーションをなす際の決定的なファクターとしての意義を与えられる。

カバニスの言葉を見よう。

「精神的共感性（sympathie morale）とは、他者の観念や情動を共有しうる能力のうちにある。つまりそれはその人自身の観念や情動を他者に共有してほしいという欲求であり、他者の意志に働きかけたいと思う欲求でもある。」（Cabanis., *OP I.*, p. 576）

肉体的諸器官が相互に共鳴し影響を与え合っていることを言うがために持ち出された「共感」という言葉は、その範囲を拡げ、特権的な器官たる脳[11]を媒介としつつ、人間が他者とコミュニケーションを持つための特権的なファクターとしての地位をここで与えられる。

本稿で最初に見たとおり、カバニスが市民に要求したことは、「その情念が公益にとって代わってしまうことがないように」ということであった。この情念をあるいは利己心と重ね合わせてみよう。カバニスによれば人間の幸福は「己の能力の全面的な展開にあり」かつ幸福を追求する権利は、人間の肉体的構造に（もしもこういってよければ）ア・プリオリに基礎付けられているものであった。一見するとこの個人の利益の追求と公益とは矛盾するものであるように見える。確かに両者は時に鋭い形で対立する相貌を我々に見せる。だがカバニスにとって両者の対立は「表面的な抗争」に過ぎない（Staum., p. 350）。両者の対立を和らげる契機として、これまたやはり人間の肉体的構造に基礎付けられた「共感」が前面に出てくる。「共感の能力」によってこそ、人間は己の自己利益の追求（これは己の能力を展開することでもあった）は公益と両立するものとなる。社会生活に安定した基盤を与えるべく陶冶されるべきは、この共感の能力ということになろう。「共感を陶冶するということは、自己利益を啓蒙することと同様に、社会的調和を促進することになる。」（Staum., p. 190）

最後に私たちの注意を引くのは、カバニスがこれほどの重要性を与えている、「共感性」という概念、これを「模倣」という概念と結び合わせて、さらに「教育」というイデオロジストたちにとって極めて重要な意味をもった概念とリンクさせているということである。決定的な箇所を見よう。

「もう一つだけ付け加えておこう。模倣の能力というものは、感覚的なあらゆる本性、とりわけ人間の本性を特徴付けるものであり、これは、個人に対してであれ、社会に対してであれ、教育の主要な手段となるものである。また、この模倣の能力はその始原において、社会的本能とほ

とんどすべてのモラルに関わる感情が基礎付けられる共感的傾向と混ざり合っている。そしてこの［共感的］傾向とこの［模倣という］能力とは、同じように一まとまりとなっている、生命体に本質的な特性なのである。このようなわけであるから、すべての知的で精神に関わる能力は、有機体を産出し保存し活動に導く能力と分かちがたく結びついている。そして、その完全性の原理が置かれているのも、その有機的組織のうちになのである。」(Cabanis., *OP I.*, p. 578)

共感の能力を基礎とした「模倣の能力」によってこそ人間は社会生活に参入することとなる。そしてこの共感の陶冶、ひいては模倣の陶冶こそが人間の社会性を育てるのだ。「模倣の能力が最高度に認められる人々は、同時に、その想像力によって迅速かつ容易でより完全に他者の立場に身を置くことができるのである。」(Cabanis., *OP I.*, p. 576)

人間の「幸福」という一点から諸学の統一を導き出し、かつ肉体的人間を論じる地平を創出したカバニスの哲学は、その実践的性格を「模倣」の陶冶に託しているように見える。「模倣」の可能性の開発とこの能力の陶冶とが、人間の社会性を創出する地平を開く。カバニスは言う。

「そして最終的には、このひたすらこの［共感という］能力から生じる模倣の能力、人間の完全性はすべてこれに依存しているのだが、この模倣の能力、そして模倣の形成と発展についての注意深い研究のみが、自然哲学にもモラルについても豊かな原理を与えてくれるのだ。」(Cabanis., *OP I.*, p. 159)

参考文献（［　］内は引用の際の略号）

カバニスの著作

・Œuvres Philosophiques de Cabanis., (1956., PUF) [Cabanis, *OP I*]（『心身相関論』はこの巻に収められている。）

・Œuvres Philosophiques de Cabanis., tome2 (1956., PUF) [Cabanis, *OP II*]

研究書

・Martin S. Staum. *Cabanis: enlightenment and medical philosophy in the French Revolution* (Princeton University Press, 1980) [Staum]

・Georges Gusdorf, *La Conscience Révolutionnaire. Les Idéologues.* (Payot, 1978) [Gusdorf]

・François Picavet, *Les ideologues.* (Olms, 1972)（原著は1895年）

注

(1) Desututt de Tracy, *Elément d'idéologie, 1ère partie, Idéologie proprement dite,* Fromman, Stuttgard, 1977（1801年に出版されたもののリプリント）, p. 259

(2) ibid., pp. 259f　なお、トラシの「学問の統一」という理念については次の論文が参考になる。Emmet

Kennedy, "Destutt de Tracy and the unity of sciences" in *Studies on Voltaire.* vol.171 (1977)

(3) ラカナル「師範学校の設立に関する報告」(『フランス革命期の公教育論』岩波文庫、2002年、pp. 338f)

(4) ちなみにメーヌ・ド・ビランはカバニスのこの「幸福」の定義に次のような批判を加えている。「自由に行使されることで幸福を構成すると言われるこれらの能力を持たない存在者にとっても十分に大きな相対的な幸福が存在することは経験が証明するところだ。そして実存の単純な感知は、これを享受する受動的な存在者を、自然と習慣によってより高貴な能力の欲求を与えられた人間よりも幸福にする。」(Œuvres de Maine de Biran., TomeXI-3., p. 81) イデオロジストたちの哲学とメーヌ・ド・ビランの哲学をわける指標の一つと言えるだろう。

(5) 本稿では以下煩雑を避けるために「精神的な」という訳語をあえて用いるが、この語の言語は "morale" であり、日本語でいう「精神的な」という語とはやや位相を異にすることをここで断っておく。

(6) 18世紀末フランスにおける医学と哲学との相互交流といった問題系については、次の概括的な論文が極めて参考になる。Sergio Moravia., "*Philosophie et médecine en France à la fin du XVIII siècle*"., in *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century.* Vol.89 (1972)

(7) 医学が個人に及ぼす以上の利点から恐らくは類推的に、「衛生学」の効用も導き出される。医学が個人の諸能力の発展を助けるのであるから、衛生学は人類全体を個人とみなすことによって、医学が個人に対するのと同じ役割を果たす。「いまや、衛生学がそれぞれの人間が位置することのできる様々な状況にのみ適用できる規則を与えるだけでは何の役にも立たない。衛生学はあえてさらなる仕事をしなくてはならない。衛生学は人類を、いわばその教育を自らが引き受けた一人の人間とみなさなければならない。そして、その存在が無限に続いていくことから、人類は完全なタイプへと徐々に近づいていくことができるのだ。この完全な状態は、人類の原初的な状態ではその理念すら与えることができなかったものだ。一言で言えば、衛生学は人間本性全体を完全なものとすることを目指す必要があるのだ。」(Cabanis., *OP I.*, p. 356) ただし当然のことながらフーコーの研究などにも目配りをしなければならないカバニスの医療政策についての議論には、本稿では触れることはできない。

(8) Desututt de Tracy, *Elément d'idéologie, 1ère partie, Idéologie proprement dite*, pp. 36f

(9) なおカバニスの「感覚性」概念の強調は、生命の基本的な働きがなにであるのかという問題系の中で歴史的に論じられるべき事柄であろう。特に注記しておくべきは、「感覚性」概念の強調が、ハラーの立てた「感覚性」と「刺激反応性」(irritabilité) との間の区別に反対する形で論じられているという点であろう。この経緯については以下の書物の該当箇所が参考になる。François Azouvi. *Maine de Biran La science de l'homme.* Vrin. 1995. p. 41　なお、カバニスの行う、「感覚性」と「刺激感応性」とを巡る議論は、そのギロチン論などにも影を落としている。Cf; Cabanis., *OP II., pp.* 492～504

(10) ところでここで確認しておきたいが、トラシのいう「感覚」とカバニスのいう「感覚性」とは、似たような言葉遣いを用いながらも位相は異にしている。つまりトラシの「感覚」概念はどうしても「意識」の概念を要請するのに対して、カバニスの「感覚性」概念は基本的に「意識」の概念の介入を拒否する。

「ある哲学者たち、さらには生理学者たちさえもが、印象が明白に意識される場合にしか感覚性を認めない。彼らにとってはこの意識が感覚性の唯一明晰な性格なのだ。しかし躊躇なく言えるが、しっかりと評価された生理学的事実にこれほど反するものはないし、観念学的な諸現象の説明にこれほど不十分なものはない。」(Cabanis., *OP I.*, p. 535)「感覚」概念と「意識」との錯綜はきわめて重要な問題を孕むものであるが、本稿では問題の所在を指摘するにとどめる。

(11) 本稿ではカバニスの医学的人間学における脳の特権性を直接には扱っていないが、以下の言葉を参照していただきたい。「別の器官が思惟や意志の産出に多かれ少なかれ影響を与えることもあるし、ある場合には、特に感じやすい特別な内臓によって人が思惟したり意志したりしているように見えることもあるが、反応の中心は常にこの脳中枢それ自身なのである。」(Cabanis., *OP I.*, pp. 602f)